

「円相から演奏まで」 ワークショップレポート



オヤマダアツシ(音楽ライター)

笑顔でマイクさん(中央)を囲む、当日参加の皆様

高速エレベーターで六本木ヒルズ森タワーの高層階へと上り、53階の森美術館に足を踏み入ると、床には無造作にさまざまな楽器が！音楽とアートの出会いにより、刺激的な時間が生まれた。

定期演奏会で演奏される作品の予習になり、知的好奇心を刺激しながら音楽のしくみを紐解いていく日本フィルのワークショップも軌道に乗ってきた。5月12日に森美術館で行われたのは、言うなればその“出張版”。会場で開催されていた『シンプルなかたち展』とのコラボレーション企画であり、美術館の会員をはじめとする方たちが集まって、音楽へ近づこうとする試みである。そのリーダー役を務めるのは言うまでもなく、日本フィルのコミュニケーション・ディレクター、マイケル・スペンサーさん。7名の楽員も参加し、5月の第670回定期演奏会で演奏された林光作曲の「WINDS」という曲をモチーフとして、その場、その時限りの新しい音楽を創造した。

参加者の多くはクラシック音楽に親しんでいるわけではなく、しかもテーマに選ばれたのは「現代音楽」と呼ばれるカテゴリーの作品。どうなってしまうのかという不安もありつつ、まずはウォーミングアップとして「自分自身を表現するモチーフやメロディを作ってみよう」という課題からスタートする。それぞれが楽器を手にして音を出すと、マイクさんは音の傾向(音色、音量など)を注意深く聴きながら、参加者を6つのグループに分けていく。ここまでが第一段階だ。

今回のワークショップには「円相から演奏まで」というサブタイトルが付いており、まずは『シンプルなかたち展』にも出品されている仙厓義梵(せんがいぎぼん)作の『円相図』(一筆書きによって円を描き、それに

よって真理や宇宙などを表現する禅の書画)がスクリーンに大きく映し出された。その上で「形、空間、時間」といったキーワードが提示され、アートの存在感と音楽の存在感について、さらには東洋と西洋の意識の差について、マイクさんからいろいろなプレゼンテーションが行われる。

たとえば浮世絵を見ながら「西洋では何かが飛んでいるという事象を見るけれど、東洋では見えない風の存在を感じる」ということや、民謡の江差追分を聴きながら「それぞれの節の長さは歌手の息がどれだけ続くかによって決められているが、西洋音楽の楽譜でそういうことはあり得ない」ということなどを例示。参加者に東洋的な美学の再認識を促すような話が続くのだが、それは「WINDS」という曲の本質へと近づく道でもあったのだ。

さて、グループ分けされた参加者たちは、楽員たちに引率されて『シンプルなかたち展』の会場を一巡。展示されている作品や、作品が置かれた空間のイメージをもとにしながら、グループ単位で音楽を作り上げていくという作業に。「音楽」の既存概念に縛られていないアート愛好

家も多いためか、楽器本来の演奏法から解放された自由な発想での音作りをする光景も見られる。イメージした音をどう形にするかという試行錯誤の中で、思いもよらない楽器の使用法を考えたグループもあった。

それぞれの音楽が完成すると、それを誰が指揮するでもなく、互いに聴き合いながら音楽をつなぎ、結果としてそれがひとつの流れとなって約12分の「作品」が生まれる。それは「円相図」の思想に極めて近いものであり、いくつかのモチーフが重なるようにして音楽になっていくという「WINDS」の仕組みにも通じるものだった。

ワークショップ参加者の中には数日後の定期演奏会で「WINDS」を聴いた方もおり、サントリーホールロビーでマイクさんと意見交換をする姿も。ジャンルという枠を超越し、音楽とアートが互いに刺激し合うようなワークショップだったが、それによって理解が進み、新鮮な耳と感覚で音楽を楽しむ聴き手が増えることも期待できる。それが従来であれば「難しい」と言われるような音楽作品であったとしてもだ。



床に置いた鉄琴の周囲を回って音を！



『円相図』の精神に着目したマイクさん。「これを茶菓子だと思って食べよ」という賛文が記されている。